

68 咬咀の源を探る

郭¹⁾ 秀梅・加藤²⁾ 久幸

「咬咀」の記載は『靈枢』：「用淳酒二十斤、蜀椒一斤、乾姜一斤、桂心一斤、凡四種皆咬咀」、『傷寒論』桂枝湯：「右五味咬咀三味」が早期のものと考えられる。先哲達の咬咀の解釈は異なっている。本論では咬咀の源流を探り、咬咀の解釈の一助を目的とする。

一、「咬咀」の諸説

「咬咀」には古代の学者による幾多の解釈がある。

1 搗碎の説・陶弘景『名医別録』の「旧方皆云咬咀者、謂秤畢搗之如大豆」、龐安常『傷寒総病論』の「如咬咀菱藕之滓状、令之粗末是也」、方有執『傷寒論条辨』に「咬咀言搗令大小適中、有粒顆可以咀嚼之而有味也」がある。

2 商量斟酌の説・蘇敬『本草序例』の「咬咀、商量斟酌之也」。

3 口齒咀嚼の説・寇宗奭『本草衍義』の「咬咀有含味之

意、如人以口齒咀嚼」、李杲の「咬咀古制也。古無鉄刃以口咬細」、張介賓『類經』の「古人以口嚼藥、碎如豆粒而用之。後世雖用刀切、而猶称咬咀者」、段玉裁『説文解字注』には「含而味之、凡湯酒膏藥、旧方皆云咬咀。」と注釈してある。

山田正珍『傷寒論集成』に「咬咀者、謂制藥為飲片、伊藤鳳山『傷寒論文字考』に「蘇恭以為商量斟酌之名、是為得之」、ほかに鈴木良知・山田業広・玉井穆元純・古矢剛齋等が「咀嚼」の説をとっている。

二、「咬咀」は「父(甫)且」となす

『傷寒論』より早期に成立し、修改されない医学資料には咬咀がなく、父(甫)且の表記だけがある。馬王堆医書の『雜療方』に「内加及約取空壘二斗父且段之」、『養生方』の「凡三物甫●●投之」、『武威漢代医簡』治伏梁裏膿在胃腸之方「凡七物皆父且」などがある。『居延漢簡』にも「●●皆父且」の記載がある。

書誌学的に考えて、『靈枢』『傷寒論』に記載された「咬咀」からは記載年代を確定することはできないが、『傷寒論』より凡そ百年ほど早く成立した「武威漢代医簡」の

「父且」により漢代の実態を裏付けることができる。

古くから「父且」が常に医書に用いられており、父且の字に意味を表す口へんを付け、咬咀にすることで、父母の父と而且の且を並べたものと区別する認識があったと考えられる。咬咀は父且よりさらに、この双音の形態の連係を増強できる。また、口へんを付けたのは、咀嚼の意味を表すためではなく、おそらく薬を口から吞むことを強調するためではないか。

古代の男性は「父」或いは「甫」と称された。「父」と「甫」が本来、同じ字だからである。「父且」が「咬咀」に改められたことは、おそらく古人の親孝行の觀念に関わると考えられる。父に口を付ければ、「無君無父」と思われる疑いを免れるだろう。すると、父且が咬咀に変わった時代は、「以孝治天下」を提唱していた晋代の可能性が極めて高い。

三、「咬咀」が迭韻連綿詞である

段玉裁は「咬咀」を「含而味之」と解釈しているが、「哺」について「哺咀蓋迭韻字」と言い切っている。この説が「咬咀」の意味を探索するための新たな道を開拓し

た。

父・甫・且は古音魚部に属し、迭韻字であり、連綿詞に構成した後、その意味は父・且の最初の意味と必然的な連係が無くなるわけである。つまり、父の本意は手で斧を持つことを表す。且は男性の生殖器を表し、祖の本字でもある。しかし、咬咀は斧・祖先の意味と全く関係がない。先ず、父且の二字を組み合わせ、その二字の音声で意味を表すだけである。

連綿詞の意義は音声に示されるので、書き方には色々ありうる。咬咀と父且の音声は共に、混ぜて搗碎する音を表している。従って、陶弘景の「搗之」の説が正しいと認められる。

医籍には連綿詞が多く存在しているが、この言語現象についての著述は極めて少ない。今回の発表はまだ導入にすぎないが、今後さらに研究を進めていきたいと思う。

(1) 順天堂大学医史学研究室・

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所

(2) 中国伝統医学研究所